

# インド・グジャラート州における外食と中食 —グジャラート・ヴィディヤーピート学生の事例研究—

篠田 隆 (大東文化大学国際関係学部)

## Eating Out and Home-Meal Replacement in Gujarat, India -A Case Study of Gujarat Vidyapith Students-

Takashi SHINODA

### はじめに

筆者はインドの食文化や食習慣調査の一環として、グジャラート州の若者（大学生や専門学校生）を対象に、アンケート調査をこれまでに3回実施した。第1次調査は、2013年8月にグジャラート・ヴィディヤーピートの100名の学生を対象に実施した（注1）。第2次調査は、2018年3月にアーメダバード市の女子公立職業教育学校の72名の学生を対象に行った（注2）。第3次調査は、2019年1月に再度グジャラート・ヴィディヤーピートで実施した（注3）。

本稿では、第3次調査結果に基づき、調査対象者世帯の食事形態の変化を外食と中食を中心に分析する。日本では女性の社会進出や少子高齢化の影響で食事形態に占める外食と中食の比重が近年高まっている。食事形態に占める内食の比重が高いインドでも、近年、食の現代化やグローバル化の影響で外食と中食の態様に変化がみられる。本稿では外食と中食の規模と動向を跡付ける。その際に、調査対象者（世帯）のさまざまな属性のうち、世帯所得、出身市町村区分、社会集団の3つの属性を中心に、調査結果の属性分析を行う（注4）。世帯所得は食習慣の経済的側面、市町村区分は料理と食関連施設の可用性（availability）やアクセシビリティ（accessibility）と関わる指標である。社会集団はインド政府が諸種の開発・福祉計画を策定する際に利用参照する官製の区分であるが、「後進階級」内の諸集団と「その他」集団の比較ができ有用なので、本稿でも分析に活用する。

本稿の構成は以下のとおり。第1節で調査対象者の属性を概観し、属性相互の関連をクロス表で確認する。第2節では、外食回数と予算の変化、家族別の外食料理選好のデータに基づき、外食の規模と動向を検討する。第3節では、中食変化の要因と主要な中食品目の消費動向のアンケート結果に依拠して、中食の規模と動向を考察する。「おわりに」で分析結果をまとめる。なお、第3次調査結果のうち、内食については別途分析する予定である。

## 1. 調査対象者の属性の相互関連

本調査では、外食、中食に関するデータを調査対象者の3種類の属性(所得階級、市町村区分、社会集団)に即して整理した。これら属性相互の関係を、属性クロス表により確認しておこう。表1に、所得階級と地方、市町村区分、社会集団間の属性クロス表、を掲げる。ここでは、グジャラート州の「地方」(地理的区分)も属性クロス表に加え、属性相互の関係をより深く検討する。なお、所得階級は収集した世帯所得に基づき、上位階級22名と下位階級22名に分類した。市町村区分は、収集した住所データに基づき、出身の自治体名から区分を行った(注5)。地方も同様に住所における県情報に依拠してグジャラート州を北グジャラート、中央グジャラート、南グジャラート、半島部に4区分した(注6)。社会集団については質問票での回答に基づき、「指定カースト」「指定部族」「その他後進諸階級」「その他」集団に4区分した。

表1：所得階級と地方、市町村区分、社会集団間の属性クロス表

属性	区分・集団	所得階級(人数)			所得階級(縦列比率)			所得階級(横列比率)		
		上位階級	下位階級	計(人)	上位階級	下位階級	計(%)	上位階級	下位階級	計(%)
地方	北グジャラート	5	3	8	22.7	13.6	18.2	62.5	37.5	100.0
	中央グジャラート	2	1	3	9.1	4.5	6.8	66.7	33.3	100.0
	南グジャラート	9	16	25	40.9	72.7	56.8	36.0	64.0	100.0
	半島部	6	2	8	27.3	9.1	18.2	75.0	25.0	100.0
	計	22	22	44	100.0	100.0	100.0	50.0	50.0	100.0
市町村	市	6	1	7	27.3	4.5	15.9	85.7	14.3	100.0
	町	5	2	7	22.7	9.1	15.9	71.4	28.6	100.0
	村	11	19	30	50.0	86.4	68.2	36.7	63.3	100.0
	計	22	22	44	100.0	100.0	100.0	50.0	50.0	100.0
社会集団	指定カースト	1	1	2	4.5	4.5	4.5	50.0	50.0	100.0
	指定部族	10	17	27	45.5	77.3	61.4	37.0	63.0	100.0
	その他後進諸階級	7	3	10	31.8	13.6	22.7	70.0	30.0	100.0
	その他	4	1	5	18.2	4.5	11.4	80.0	20.0	100.0
	計	22	22	44	100.0	100.0	100.0	50.0	50.0	100.0

(注)属性クロス表の表示にあたっては、縦列に「地方」「市町村」「社会集団」の3属性を、横列に「所得階級」を配置した。

「所得階級」は「人数」、「縦列比率」(属性別階級別計に占める各区分・集団の比率)、

「横列比率」(属性別区分・集団別計に占める階級別の比率)の3種類の欄に分けて表示した。

(出所)筆者の食習慣調査(2019年)

まず、所得階級と地方とのかかわりをみると、回答者44名中25名が南グジャラートに集中している。その南グジャラートでは下位階級が上位階級を2倍弱上回っているのに対して、その他の地方では上位階級は下位階級の人数を上回っている。このように、下位階級は南グジャラートに集中する傾向を示している。

所得階級と市町村区分のかかわりも興味深い。「市」と「町」は各7名、「村」は30名と調査対象者の68%は「村」の出自である。所得階級に占める上位階級の比率がもっとも高いのは「市」でそれに「町」が続いている。「村」では、下位階級が上位階級を大きく上回り、出身の市町村区分と世帯所得ははっきりとした相関関係を示している。

所得階級と社会集団についても、本調査の調査対象者の特性がよく表れている。4つの社会集団中、「指定部族」は27名と5分の3ほどを占め、それに「その他後進諸階級」が10名で続いている。「その他」集団は5名、「指定カースト」は僅か2名と少数である。所得階級に占める上位階級の比率が下位階級を大きく下回るのは「指定部族」だけで、「その他」集団と「その他後進諸階級」は

上位階級の比率が下位階級を上回っている。「指定カースト」は両階級1名ずつと同数である。

もうひとつ、市町村区分と社会集団のかかわりも表2でみておこう。社会集団のなかで、「指定部族」の82%、「その他後進諸階級」の70%の市町村区分が「村」となっている。これに対して、「その他」集団では全員が「市」「町」の区分となっており、対照的である。「指定カースト」2名は「市」と「村」に分かれている。市町村区分は、食関連施設（レストラン、露店、食材・食品販売店等）の可用性 (availability) とも大きく関わっており、この点については本論での分析の際に言及する。

表2：市町村と社会集団の属性クロス表

社会集団	市町村(人数)				市町村(縦列比率)				市町村(横列比率)			
	市	町	村	計(人)	市	町	村	計(%)	市	町	村	計(%)
指定カースト	1	0	1	2	14.3	0.0	3.3	4.5	50.0	0.0	50.0	100.0
指定部族	3	2	22	27	42.9	28.6	73.3	61.4	11.1	7.4	81.5	100.0
その他後進諸階級	1	2	7	10	14.3	28.6	23.3	22.7	10.0	20.0	70.0	100.0
その他	2	3	0	5	28.6	42.9	0.0	11.4	40.0	60.0	0.0	100.0
計	7	7	30	44	100.0	100.0	100.0	100.0	15.9	15.9	68.2	100.0

(注)属性クロス表の表示にあたっては、縦列に「社会集団」を、横列に「市町村」を配置した。

「市町村」は、「人数」、「縦列比率」(市町村別計に占める各集団の比率)、

「横列比率」(集団別計に占める市町村別の比率)の3種類の欄に分けて表示した。

(出所)筆者の食習慣調査(2019年)

以上の検討から、所得階級、市町村区分、社会集団の3つの属性は相互に深く関わっていることが確認できた。とくに、社会集団のなかの「指定部族」と「その他」集団では、市町村区分では前者が「村」に、後者が「市」「町」に集中しており、所得階級でも前者が「下位階級」で後者が「上位階級」に集中するなど、3つの属性の相互関連が対照的である。ただし、「その他後進諸階級」は「村」の出身が多いけれども、所得階級では「上位階級」の回答者数が「下位階級」を上回っている。「村」にも少数であるが存在する所得階級の「上位階級」の一部を彼らが占めているためである。「指定カースト」は回答者数が2名だけであり、属性のかかわりについても、市町村区分では「市」と「村」に、所得階級でも「上位階級」と「下位階級」に分かれており、属性の傾向を見出すことはできない。

## 2. 外食の規模と動向

### (1) 調査対象者の属性別外食回数の動向

#### 1) 外食変化の有無と種類

今回の調査では調査時点(2019年)と10年前(2009年)を比較して外食に変化があったかどうか、あった場合にはどのような種類の変化なのかを調査した。表3にみるように、全体では63%の学生がこの10年間に外食に「変化あり」と回答し、「変化なし」の37%を上回っている。「変化あり」の回答比率を評価するにあたり、内食に関する同質問の回答比率が参考となる。ちなみに、内食については、「朝食」「昼食」「夕食」に分けてこの10年間の変化を問うたところ、「変化あり」との回答比率は、「朝食」が86%、「昼食」は82%、「夕食」は77%であった。このように、外食

に「変化あり」とする回答比率は、内食に「変化あり」とする回答比率を14～23ポイントほど下回っている。このことから、外食に変化は生じているものの、その規模と程度は内食における変化ほどに大きくはなかったと捉えることができよう。

表3：過去10年間(2009-2019年)の外食における変化の有無

人数/比率	変化の有無	所得階級			市町村				社会集団				
		上位階級	下位階級	計	市	町	村	計	指定カー スト	指定部族	その他後 進諸階級	その他	計
人数 (人)	変化あり	14	13	27	5	7	15	27	2	17	3	5	27
	変化なし	8	8	16	2	0	14	16	0	9	7	0	16
	計(人)	22	21	43	7	7	29	43	2	26	10	5	43
比率 (%)	変化あり	63.6	61.9	62.8	71.4	100.0	51.7	62.8	100.0	65.4	30.0	100.0	62.8
	変化なし	36.4	38.1	37.2	28.6	0.0	48.3	37.2	0.0	34.6	70.0	0.0	37.2
	計(%)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

(注)比率は、縦列の計(人数)に占める「変化あり」と「変化なし」の回答者数の比率を示す(%)。

(出所)筆者の食習慣調査(2019年)

次に属性別に検討してみよう。所得階級については、上位階級と下位階級間に「変化あり」との回答比率に大きな違いはみられなかった。後に検討するように、変化の主要な要因は若干異なっているが、変化の認識にみられる階級間の相違は小さかった。市町村区分については、明確な相違がみられた。「村」では「変化あり」と「変化なし」の回答比率が拮抗しているのに対して、「市」と「町」では「変化あり」の比率が「変化なし」を大きく上回った。「村」の外食については、人口の大きな村でなければ、村内にレストランや露店などの施設が存在することは稀である。そのため、外食の機会自体が村外に出た時に限定されるので、「変化なし」には、10年前も現在も外食そのものをほとんど行っていない学生の回答も含まれているものと推測できる。これに対して、レストランや露店などの施設が存在する「市」と「町」のほうが、外食を行う人の比率が高く、外食の変化にもより敏感に回答したものと理解できる。社会集団については、「その他」集団と「指定カー」とは全員が「変化あり」と回答した。とくに、「その他」集団は所得階級では上位が多く、全員が「市」「町」出身であり、「村」出身者はいない。それに対して、「その他後進諸階級」と「指定部族」の多くは「村」出身であるが、「変化あり」の回答者比率は大きく異なり、「指定部族」の65%に対して「その他後進諸階級」はわずか30%に過ぎなかった。

以上の検討を踏まえ、次に食変化の項目別の比率構成を検討してみよう。表4に「外食変化項目別比率の分布」を掲げる。外食変化の項目として、「予算」「頻度」「品目」の3つを示し、それらの内該当する項目を選んでもらった(複数回答)。項目欄には属性別の学生数に占める当該項目の回答数の比率を表示した。このため、複数回答数が学生数を上回る属性では、当該属性の合計比率が100%を上回り、逆に回答数が学生数を下回る属性では、合計が100%を下回った。ここでの合計は、実質的に、属性別学生数に占める複数回答数の比率を示している。ちなみに、全体の合計の比率は106.8%であるが、属性別の合計比率には30%から200%までの幅がある。

全体の項目別比率は、「予算」が43%と最も高く、それに「品目」が39%と続いている。調査対象期間である10年間にインドの物価上昇率は年率3%～11%台を推移し、外食の料金も大きく変動したことが「予算」の回答比率が高いことの背景にある。また、この期間は1990年代から開始

された経済自由化の影響が顕在化した時期で、外食の品目に外来料理やファスト・フードなどの新たな品目が加わり「品目」の変化をもたらした。これらに対して、「頻度」の比率は25%ともっとも低かった。食事形態に占める内食の比重が高く、外食の比重はそれほど高まらなかったためだと理解できる。

表4：属性別外食変化項目別複数回答数比率の分布

外食変化項目	所得階級			市町村				社会集団				
	上位階級	下位階級	計	市	町	村	計	指定カー スト	指定部族	その他後 進諸階級	その他	計
予算	54.5	31.8	43.2	42.9	85.7	33.3	43.2	100.0	44.4	10.0	80.0	43.2
頻度	13.6	36.4	25.0	28.6	14.3	26.7	25.0	50.0	29.6	0.0	40.0	25.0
品目	40.9	36.4	38.6	57.1	42.9	33.3	38.6	50.0	44.4	20.0	40.0	38.6
計(%)	109.1	104.5	106.8	128.6	142.9	93.3	106.8	200.0	118.5	30.0	160.0	106.8
複数回答総数	24	23	47	9	10	28	47	4	32	3	8	47
学生数(人)	22	22	44	7	7	30	44	2	27	10	5	44

(注) 回答総数は複数回答なので、学生数を越える場合が多い。  
 ここの計(比率)は、属性別学生数に占める複数回答数の比率を表示しているため、多くの場合、100%を上回っている。  
 下段に複数回答総数と学生数(人)を示した。  
 (出所) 筆者の食習慣調査(2019年)

属性別では、所得階級の上位階級は「予算」が、下位階級は「頻度」と「品目」が相対的に高い比率になっている。複数回答数を示す合計の比率は、上位階級と下位階級ともに100%強で近似している。市町村区分では、「村」の合計比率が93%と100%を切るなか、「市」と「町」の合計比率は120～140%台となっており、対照的である。項目別の比率では、「市」では「品目」が、「町」では「予算」が、もっとも高い比率を占めている。「村」では3項目ともに20～30%台の低い比率となっている。社会集団では、「その他後進諸階級」の合計比率が30%ときわめて低い比率を示している。それ以外の集団は100%以上を示している。項目別の比率を比較すると、「その他」集団と「指定カースト」では「予算」が、もっとも高い比率となっている。「指定部族」の項目別比率は全体のものに近似し、「頻度」の比率がもっとも低い。「その他後進諸階級」は「頻度」が0%であり、この10年間に「頻度」に変化がなかったことを示している。総じて、3項目のなかで「頻度」がもっとも低い比率であり、これが外食展開の大きな制約になっていたことが属性別の検討からも確認できた。

## 2) 外食回数の動向

本調査では月間外食回数の質問を行ったので、その回答結果を検討してみよう。表5に、10年前(2009年)と現在(2019年)における朝食、昼食、夕食別月間外食回数別の回答者数の分布、を掲げる。同表では、実際に外食を行った回答者数を月間外食回数別にまとめているので、まず、10年前と現在における回答者数の推移をみておこう。10年前の外食回数の回答者数は、朝食が10名、昼食と夕食は各7名に過ぎなかった。調査対象者は44名なので、このうち外食で朝食を食べたとの報告者は23%、昼食と夕食は各々16%に過ぎなかった。10年前とはいえ、2000年代後半の時期であり、1990年代初頭から開始された経済自由化政策の効果が実質的に表れ始めた時期でもあった。食習慣についても「予算」や「品目」の変化はすでに検討したように一定程度みられたが、外食回数への影響はやはり僅少であったと確認することができる。もうひとつ興味深いのは、外食

で朝食を食べたとの報告者の比率が、昼食や夕食の比率を上回っていることである。外食にはミールとスナック類の双方がある。今回の調査では、朝食、昼食、夕食別に外食がミールなのかスナック類なのか調べなかったが、朝食でミールは考えづらいので、朝食はより安価で外食がしやすいスナック類が主体になっているものと推測できる。月間外食回数は朝食が1～2回、昼食と夕食が1～3回の範囲であるが、回答者のほとんどは朝食、昼食、夕食いずれも1回と回答しており、外食回数はきわめて僅少であった。すなわち、外食を行った回答者の比率と、実際の外食の頻度がともにきわめて低い水準にあった。

表5：10年前（2009年）と現在（2019年）における朝食、昼食、夕食別月間外食回数別の回答者数の分布

10年前の 朝昼夕	月間外食 回数	所得階級			市町村				社会集団				
		上位階級	下位階級	計(人)	市	町	村	計(人)	指定カー スト	指定部族	その他後 進諸階級	その他	計(人)
朝食	1	6	2	8	3	2	3	8	0	5	2	1	8
	2	0	2	2	0	1	1	2	0	1	1	0	2
	計	6	4	10	3	3	4	10	0	6	3	1	10
	計	4	3	7	2	2	3	7	0	5	1	1	7
昼食	1	4	1	5	2	2	1	5	0	3	1	1	5
	2	0	1	1	0	0	1	1	0	1	0	0	1
	3	0	1	1	0	0	1	1	0	1	0	0	1
	計	4	3	7	2	2	3	7	0	5	1	1	7
夕食	1	4	1	5	2	2	1	5	0	3	1	1	5
	2	0	1	1	0	1	0	1	0	0	1	0	1
	3	0	1	1	0	0	1	1	0	1	0	0	1
	計	4	3	7	2	3	2	7	0	4	2	1	7
現在の	月間回数	所得階級			市町村				社会集団				
	朝昼夕 回数	上位階級	下位階級	計(人)	市	町	村	計(人)	指定カー スト	指定部族	その他後 進諸階級	その他	計(人)
朝食	1	2	2	4	0	1	3	4	0	2	2	0	4
	2	4	4	8	3	0	5	8	2	5	0	1	8
	3	3	2	5	1	2	2	5	0	3	1	1	5
	4	0	1	1	0	0	1	1	0	1	0	0	1
	5	2	1	3	1	1	1	3	0	2	0	1	3
	25	0	1	1	0	0	1	1	0	1	0	0	1
計	11	11	22	5	4	13	22	2	14	3	3	22	
昼食	1	4	3	7	2	1	4	7	0	4	2	1	7
	2	3	5	8	0	2	6	8	1	6	0	1	8
	4	1	2	3	1	1	1	3	0	2	1	0	3
	10	0	1	1	0	0	1	1	0	1	0	0	1
	計	8	11	19	3	4	12	19	1	13	3	2	19
夕食	1	3	3	6	2	1	3	6	0	3	2	1	6
	2	4	2	6	1	1	4	6	1	5	0	0	6
	3	0	1	1	0	0	1	1	0	1	0	0	1
	5	0	2	2	0	1	1	2	0	1	1	0	2
	8	0	1	1	0	0	1	1	0	1	0	0	1
	計	7	9	16	3	3	10	16	1	11	3	1	16

(注) 10年前とは2009年、現在とは2019年を指す。月間回数とは月当たりの外食回数のことである。

数値は、属性別朝昼夕食別月間外食回数別の回答者数(人)を示す。

(出所)筆者の食習慣調査(2019年)

属性別にみると、所得階級では上位階級が下位階級よりも、市町村区分では「市」と「町」が「村」よりも外食の報告者数比率が高い。ただし、社会集団では「その他」集団の回答者数比率が小さく、他の区分との違いはみられなかった。「指定カースト」では回答者がおらず、「その他後進諸階級」も「指定部族」も回答者数比率は僅少であった。

次に、現在における外食回数別の回答者数の分布を検討しよう。表5にみるように、現在における外食回数の回答者数は、朝食が22名、昼食が19名、夕食が16名であった。44名の調査対象者中、外食で朝食を食べたとの報告者は50%、昼食は43%、夕食は36%であった。10年前の外食回数別の回答者数の比率に比べて、朝食は約2倍に、昼食は2.6倍に、夕食は2.3倍に増加したのにもか

かわらず、いまだ回答者数は外食がもっとも展開している朝食でも50%に過ぎない。10年前における外食の回答者数の比率が非常に低かったうえに、その後の10年間においても外食の規模と展開に大きな制約のあったことが確認できる。

現在についても、朝食の外食回答比率が昼食や夕食の同比率を上回ったのは、10年前と同様に、朝食はより安価で外食がしやすいスナック類が主体になっていたためだとおもわれる。月間外食回数の幅は10年前よりは増加した。朝食では回答者の1人は月間25回と報告している。昼食については最大で10回、夕食では最大で8回との報告があった。このように、月間外食回数の幅が広がったことはこの10年間の大きな変化と位置付けられるものの、報告者の半数以上は月間2回までの僅かな回数に集中していた。この10年間に外食を行ったとの報告者比率は増加し、月間外食回数の幅も広がったが、それらの変化は食事形態における外食の位置づけを変えるほどの規模の変化ではなかった。

属性別にみると、所得階級の朝食については上位階級と下位階級の外食の回答者数比率と月間外食回数の分布が近似しているが、昼食と夕食では下位階級の回答者数比率と月間外食回数の分布幅が上位階級を上回っていることが確認できる。市町村区分では「市」と「町」が「村」よりも外食の回答者数比率が高い状態は継続しているが、その差は大きく縮小してきている。社会集団では「その他」集団の回答者数比率が朝食では若干高まったものの、昼食では伸びは小さく、夕食では変化はみられなかった。「その他後進諸階級」は昼食と夕食で回答者数比率がわずかに伸びただけであった。10年前には外食についての具体的な回答のなかった「指定カースト」は、現在の外食については回答があったが、いずれも月間外食回数は2回であり、外食の規模は小さかった。社会集団のなかで、朝食、昼食、夕食における外食の回答者数比率と月間外食回数の幅の双方を増加させたのは「指定部族」であった。外食の回答者数比率は朝食、昼食、夕食いずれについても2倍以上の目立った増加を示した。属性間のクロス表の検討で明らかのように、「指定部族」には世帯所得の下位階級と「村」に居住する回答者が多い。それゆえ、この10年間における外食状況の際立った変化として、所得階級、市町村区分、社会集団を構成する階級間、区分間、集団間の外食回答者数比率や月間外食回数幅にみられる格差が大きく縮小したことが指摘できる。同時に、それと同じほど重要な知見として、10年前に外食回答者数比率が若干なりとも優勢であった階級、区分、集団の外食回答者数比率が予期したほどには伸びなかったことに留意する必要がある。簡単に言うと、インドの食習慣における内食の優勢が外食の展開を抑制する大きな要因になっているものと考えられる。この点に関しては、今後さまざまな観点から議論を詰めてゆきたい。

## (2) 外食の頻度と料金

第3次調査では、10年前（2009年）と現在（2019年）における外食の月間総回数の情報を外食先別に、また料理の様式別に収集した。外食先は「レストラン」と「露店」に2分した。レストランは常設の飲食店、露店は屋台や組立式の飲食店を指す。レストランは施設の建築費、維持費等が露店の屋台や組立式の設営よりも嵩むので、料理の料金も露店よりは高くなる。この2つの外食先

を回答者がどのように使い分けているのか興味深い。

表6に、10年前と現在における外食先別料理別月間外食総回数の分布、を掲げる。料理については、表内に示した料理名のなかから該当する料理をチェックしてもらい、月間総回数を回答してもらった。なお、本質問への回答者は対象者中28名であった。

それでは、10年前における外食先別状況から検討してみよう。10年前の料理についての回答者は12名のみであった。そのうち6名は複数の外食先や料理の回答をしたので、延回答者数は22名であった。回答者当たり1.8回の回答をしたことになる。同表には外食先別に月間総回数とその比率を示した。レストランの月間総回数は28回であり、露店の25回を若干上回っているが、両者の差は小さい。レストランでの月間総回数とその比率からみる主要な料理はグジャラート料理の43%で、それに「その他」の36%、パンジャブ料理と中華料理の各7%が続いている。料理名の「その他」の回答のなかで、グジャラート特有のスナック類（ファルサン：farsan と総称されることが多い）の個別品目名が併記された回答がいくつかあったことを踏まえると、10年前のレストランでの料理・品目は圧倒的にグジャラート料理とスナック類に集中していたことが確認できる。それに続くパンジャブ料理や中華料理の月間総回数やその比率は非常に低かった。露店では「その他」の比率がグジャラート料理の比率を若干上回ったが、両者を合わせた比率は、レストランの場合と同様に、70%台と圧倒的に高かった。露店でそれらに続くのは、ピザ・バーガーの12%と中華料理の8%であった。以上のように、10年前の外食の大きな特徴は、第1に、外食機会自体が非常に少なかったこと、第2に、外食先にかかわらず郷土料理として馴染み深いグジャラート料理とスナック類を外食でも選好したことの2点にある。

次に、現在の外食先別状況を検討してみよう。現在の料理についての回答者は28名であった。そのうち20名は複数の外食先や料理の回答をしたので、延回答者数は80名であった。回答者当たりでは2.9回の回答をしたことになり、10年前よりも回答数が回答者平均で1.1回増加した。

レストランの月間総回数は158回、露店は135回であり、ともに10年前の同回数を大きく上回った。レストランでの月間総回数とその比率からみる主要な料理はグジャラート料理の26%で、「その他」の25%と順位は10年前と変わらないものの、月間総回数の合計に占める比率は両者を合わせて50%ほどに大きく減少した。この変化は、グジャラート料理のミールやスナック類が外食メニューとしていまだに5割のシェアを保っているという側面と、グジャラート料理以外の料理のシェアがそれら料理への関心の高まりとともに増加したという側面の双方から評価する必要がある。グジャラート料理以外のレストランの出店が増加したことはこの変化の物質的な前提をなしており、レストランについては、とくにパンジャブ料理（22%）と中華料理（15%）が比率を伸ばした。それらに続くのは南インド料理とピザ・バーガーであるが、10年前の比率を若干上回る程度で、レストランにおけるこれらの伸び率は小さかった。



表6：10年前（2009年）と現在（2019年）における外食先別料理別月間外食総回数の分布

10年前/ 現在	料理	レストラン		露店	
		月間総回 数(回)	比率(%)	月間総回 数(回)	比率(%)
10年前	グジャラート料理	12	42.9	8	32.0
	パンジャープ料理	2	7.1	1	4.0
	南インド料理	1	3.6	1	4.0
	中華料理	2	7.1	2	8.0
	ピザ・バーガー	1	3.6	3	12.0
	その他	10	35.7	10	40.0
	小計	28	100.0	25	100.0
現在	グジャラート料理	41	25.9	43	31.9
	パンジャープ料理	35	22.2	15	11.1
	南インド料理	10	6.3	14	10.4
	中華料理	23	14.6	28	20.7
	イタリア・メキシコ・タイ料理	1	0.6	0	0.0
	ピザ・バーガー	8	5.1	8	5.9
	その他	40	25.3	27	20.0
	小計	158	100.0	135	100.0

(注)10年前とは2009年、現在とは2019年を指す。  
 外食先は「レストラン」と「露店」に分けて表示した。  
 月間総回数には回答者の報告した月間回数の累計を示した。  
 料理の「その他」にはグジャラート特有のスナック類などが含まれている。  
 (出所)筆者の食習慣調査(2019年)

露店での月間総回数とその比率からみる主要な料理はレストランの場合と同様に、グジャラート料理と「その他」であり、月間総回数の合計に占める比率は両者を合わせて52%に減少した。露店の場合も、グジャラート料理とスナック類が一定のシェアを保つ反面、他の料理のシェアが増加したが、それらシェアが増加した料理の種類はレストランの場合とは異なっていた。10年前に比べシェアを大きく伸ばしたのは中華料理の21%と南インド料理の10%であった。これら2種類の料理は露店においてとくにシェアを伸ばした料理であった。これに対して、パンジャープ料理は11%を占めているものの、レストランにおける同比率の半分ほどに過ぎなかった。このように、レストランと露店では、この10年間におけるグジャラート料理とスナック類の比率の動向は類似しているが、それら以外の料理の比率構成には違いがみられることが確認できた。

外食の月間総回数の検討を踏まえ、次に、表7に基づき、外食の平均月間回数と一人当たり料金を検討してみよう。同表の平均月間回数とは、該当する料理を外食したと回答した人たちの平均月間回数のことであり、その料理を外食した人たちが月にどれほど外食したのかの回数（規模）を知ることができる。また、一人当たり料金とは該当する料理の一人一回当たりの料金のことで、レストランと露店間で、また料理別にどれくらい料金差があったのか確認することができる。

まず、10年前のデータから検討しよう。料理全体の平均月間回数は、レストランが1.6回、露店が1.7回と近似しており、かつともに月2回を下回っていた。料理別にみると、レストランでは「その他」(2.6回)とグジャラート料理(1.7回)が比較的に多く、他の料理はすべて月1回のみとの回答であった。外食としてレストランではグジャラート料理とスナック類の人気が高かったことが、ここでも確認できる。露店ではピザ・バーガーと中華料理の平均月間回数が月2～3回と比較的大きく表れているが、これは回答者数自体が1～2名ときわめて少数であった点に留意する必要

がある。回答者数がより多い「その他」とグジャラート料理はここでも月2回を若干下回る回数となっている。

表7：10年前(2009年)と現在(2019年)における外食先別料理別平均月間回数と一人当たり料金の分布

10年前/ 現在	料理	レストラン		露店	
		平均月間回数(回)	一人一回当たり料金(ルピー)	平均月間回数(回)	一人一回当たり料金(ルピー)
10年前	グジャラート料理	1.7	49	1.6	46
	パンジャブ料理	1.0	50	1.0	45
	南インド料理	1.0	n.a.	1.0	120
	中華料理	1.0	50	2.0	38
	ピザ・バーガー	1.0	n.a.	3.0	n.a.
	その他	2.6	65	1.9	48
	小計	1.6	54	1.7	50
現在	グジャラート料理	2.3	89	5.4	50
	パンジャブ料理	2.1	135	2.1	67
	南インド料理	2.5	118	3.5	90
	中華料理	2.6	119	4.7	87
	イタリア・メキシコ・タイ料理	1.0	200	n.a.	n.a.
	ピザ・バーガー	1.3	176	2.7	100
	その他	2.4	73	2.7	43
	小計	2.2	111	3.6	63

(注)10年前とは2009年、現在とは2019年を指す。  
 外食先は「レストラン」と「露店」に分けて表示した。  
 平均月間回数には回答者当たりの月間回数を示した。  
 1インド・ルピーは2009年には約1.9円、2019年には約1.5円であった。  
 料理の「その他」にはグジャラート特有のスナック類などが含まれている。  
 (出所)筆者の食習慣調査(2019年)

10年前の一人一回当たりの料金はレストラン全体では54ルピーと露店の50ルピーを若干上回るが僅差になっている。レストランでは料理の種類にかかわらず、50～60ルピー台となっている。露店では回答者が少なかった南アジア料理が120ルピーと報告されているが、他の料理については30～40ルピー台であり、レストランよりは若干安くなっている。なお、一部の料理については料金の記載のない回答があったので、該当箇所はn.a.と表記してある。

次に、現在のデータを検討しよう。料理全体の平均月間回数は、レストランが2.2回、露店が3.6回と10年前の1.5倍から2倍ほど増加した。料理別にみると、レストランでは「イタリア・メキシコ・タイ料理」と「ピザ・バーガー」以外の料理はすべて平均月間回数が2以上に増加した。グジャラート料理とスナック類以外の外食に対する関心が高まった結果である。露店ではグジャラート料理(5.4回)のほかに、中華料理(4.7回)と南インド料理(3.5回)の平均月間回数が大きく増加した。いずれも、露店における平均月間回数がレストランにおける同料理の平均月間回数を大きく上回っている。ピザ・バーガーも同様であった。このように、この10年間における変化の特徴は、外食の平均月間回数がレストランと露店ともに伸びたこと、またグジャラート料理とスナック類以外の料理の平均月間回数も増え、外食における料理の選択が多様になったことにある。

現在の一人一回当たりの料金はレストラン全体では111ルピー、露店では63ルピーであった。10年前には両者の料金差は僅少であったが、現在では全体の一人一回当たり料金で48ルピーもの

違いが生じている。露店は安く気軽に食べられるのが利点であり、今回の調査結果は、筆者が現地のレストランや露店で食べ比べた際の実感と符合する。レストランで一人一回当たり料金が高いのはイタリア・メキシコ・タイ料理とピザ・バーガーであり、安いのはグジャラート料理とスナック類であった。露店でもピザ・バーガー、南インド料理、中華料理などの一人一回当たり料金はグジャラート料理とスナック類を上回っていた。

### (3) 家族別の外食料理選好

本調査では回答者だけではなく、回答者世帯の他のメンバーの外食料理の選好についてのデータも収集した。回答者に回答者を含む世帯員の現在の外食における料理選好のトップ3の情報を提供してもらった。表8に、家族別外食料理別選好比率の分布、を掲げる。同表における料理の欄は、いわゆるミールとしての一群の料理とファストフードやスナック類などの軽食の料理に2分して表示した。トップ3にあげられた料理についての延回答数はミールが98、軽食が33、合計で131であった。家族別の欄では自分を含む3世代の家族（祖父母世代、親世代、現世代）をカバーし、家族別にトップ3に含められた料理情報を料理別の比率として表示した。また、「トップ3の選好」の欄には、トップ3の順位別に料理別の比率を示した。ちなみに、131の回答中、トップ1の回答数は59、トップ2は45、トップ3は27であった。

以上を踏まえ、家族別に外食料理別選好比率を検討してみよう。祖父母世代の回答数は合わせて5と少なかった。祖父はグジャラート料理のみ、祖母はグジャラート料理とスナック類のみを選好した。親世代の回答数は合わせて27であった。父はグジャラート料理とスナック類の選好比率が高いのに対して、母の場合は中華料理とパンジャブ料理やイタリア料理に好み分散していた。祖父母世代と父母世代に共通する傾向として、外食で選考する料理のなかでグジャラート料理とスナック類の比率が非常に高いことが指摘できる。現世代には自分、兄弟、姉妹が含まれ、合わせて99の回答があった。現世代に共通するのはパンジャブ料理と中華料理の比率が各々20%以上と高いことにある。また、イタリア料理と非菜食料理も比率には若干のばらつきはあるが、現世代に共通する選好料理となっている。グジャラート料理とスナック類は、祖父母世代や親世代に比較すると、選好比率は低くなっている。

表8：家族別外食料理別選好比率の分布(2019年)

料理	家族別外食料理選好									トップ3の選好		
	祖父	祖母	父	母	自分	兄弟	姉妹	計(比率)	計(回答数)	トップ1比率(%)	トップ2比率(%)	トップ3比率(%)
グジャラート料理	100.0	33.3	30.8	14.3	10.6	2.6	14.3	13.0	17	13.6	6.7	22.2
パンジャブ料理	0.0	0.0	15.4	21.4	27.7	21.1	21.4	22.1	29	30.5	20.0	7.4
南インド料理	0.0	0.0	7.7	0.0	4.3	0.0	7.1	3.1	4	5.1	2.2	0.0
中華料理	0.0	0.0	0.0	28.6	21.3	26.3	28.6	21.4	28	16.9	35.6	7.4
イタリア料理	0.0	0.0	0.0	21.4	10.6	7.9	7.1	9.2	12	5.1	0.0	33.3
非菜食料理	0.0	0.0	7.7	0.0	2.1	13.2	7.1	6.1	8	6.8	6.7	3.7
小計	100.0	33.3	61.5	85.7	76.6	71.1	85.7	74.8	98	78.0	71.1	74.1
ファストフード	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.6	14.3	2.3	3	0.0	0.0	11.1
間食(ナーシュター)	0.0	0.0	0.0	0.0	2.1	5.3	0.0	2.3	3	3.4	0.0	3.7
サンドイッチ	0.0	0.0	7.7	7.1	2.1	0.0	0.0	2.3	3	1.7	4.4	0.0
スナック類	0.0	66.7	30.8	7.1	19.1	21.1	0.0	18.3	24	16.9	24.4	11.1
小計	0.0	66.7	38.5	14.3	23.4	28.9	14.3	25.2	33	22.0	28.9	25.9
計(比率)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	131	100.0	100.0	100.0
計(回答数)	2	3	13	14	47	38	14	131		59	45	27

(注)料理の欄は、いわゆるミールとしての一群の料理とファストフードやスナック類などの軽食の料理に2分して表示した。

家族別の欄では自分(現世代)を含む3世代の家族(祖父母世代、親世代、現世代)をカバーした。

「トップ3の選好」の欄には、トップ3の順位別に料理別の比率を示した。

数値は家族別回答数に占める料理別回答数の比率(%)である。また、最下段に回答数(回)も表示した。

(出所)筆者の食習慣調査(2019年)

全世代の合計では、ミールが75%、軽食が25%ほどの比率構成になっている。ミールのなかでは、パンジャブ料理と中華料理の比率が各々20%を超え、人気の高い料理となっている。これらは現世代にとくに選好される料理である。それに続くのがグジャラート料理で、とくに祖父母世代や親世代に人気がある。軽食のなかではスナック類の比率が18%であり他を引き離している。スナック類はどの世代でも選好されているが、とくに祖父母世代や親世代にとって欠かせない外食料理となっている。サンドイッチは親世代で、ファストフードは現世代で人気の高い軽食である。

次に、選好の順位に注目し、トップ3中の順位別に選好された料理の比率を比較検討してみよう。第1位には回答者がもっとも好む料理が選好されており、もっとも比率の高かったのはパンジャブ料理(31%)で、それに中華料理(17%)とスナック類(17%)が続いた。これらの3料理は第2位の選好においても高い比率を示しており、外食に当たり優先度の高い料理と捉えられる。これに対して、第3位の比率が第1位と第2位の比率を大きく上回っているのは、グジャラート料理とイタリア料理の2つである。これらは第3位には選ばれているものの、他の料理に比べて優先度の低い位置づけであると理解することができる。グジャラート料理については、祖父母世代と親世代では第1位に選好したが、現世代では選好の対象にはなるものの優先度の低い第3位での選好が多かった。このように、トップ3の選好順位別の検討から、グジャラート料理についての世代差も確認できる。軽食については、スナック類とサンドイッチが第2位までの比率が比較的大きく、軽食のなかでは優先度の高いメニューであった。これに対して、現世代のみが選んだファストフードは第3位以外では選好されていない。間食(ナーシュター)とは現地で一般的な軽食を指す言葉で、料理や品目は特定されない。今回の調査では現世代のみがこの表現を使い、その順位は第1位と第3位に分散していた。

軽食に分類したスナック類については、個別の品目の情報も収集しているので、表9に基づき、家族別外食スナック類品目別選好比率の分布、を検討してみよう。報告されたスナック類の品目についての回答数は全部で24であった(注7)。全体の中で、もっとも人気が高かったのは、パーニー

プーリー (21%) とワーダーパーウ (21%) の2つで、それにダベリー (17%)、パーウバージー (17%)、サモサー (13%) が10%台で続いた。残りは回答数が各1回のダールワーダー (4%)、カーマン (4%)、パコーダー (4%) であった。回答された品目は比較的多様であった。回答数が僅少なので、世代差を読み取るのは困難であるが、パーニープーリーとサモサーが現世代に、パーウバージーが祖父母世代と親世代にのみ選好されている点については、さもありなんと実感できる。インド土着のバーガーともいえるワーダーパーウが現世代のみに選好されているのも興味深い。

表9：家族別外食スナック類品目別選好比率の分布 (2019年)

品目	家族別外食品目選好						トップ3の選好			
	祖母	父	母	自分	兄弟	計(比率)	計(回答数)	トップ1比率(%)	トップ2比率(%)	トップ3比率(%)
パーニープーリー	0.0	0.0	0.0	44.4	12.5	20.8	5	30.0	9.1	33.3
ワーダーパーウ	0.0	0.0	0.0	33.3	25.0	20.8	5	30.0	18.2	0.0
ダベリー	0.0	25.0	0.0	11.1	25.0	16.7	4	10.0	9.1	66.7
パーウバージー	50.0	50.0	100.0	0.0	0.0	16.7	4	20.0	18.2	0.0
サモサー	0.0	0.0	0.0	11.1	25.0	12.5	3	0.0	27.3	0.0
ダールワーダー	0.0	25.0	0.0	0.0	0.0	4.2	1	0.0	9.1	0.0
カーマン	0.0	0.0	0.0	0.0	12.5	4.2	1	10.0	0.0	0.0
パコーダー	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.2	1	0.0	9.1	0.0
計(比率)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	24	100.0	100.0	100.0
計(回答数)	2	4	1	9	8	24		10	11	3

(注) 家族別の欄では自分を含む3世代の家族(祖父母世代、親世代、現世代)をカバーした。

「トップ3の選好」の欄には、トップ3の順位別に品目別の比率を示した。

数値は家族別回答数に占める品目別回答数の比率(%)である。また、最下段に回答数(回)も表示した。

(出所) 筆者の食習慣調査(2019年)

### 3. 中食の規模と動向

#### (1) 中食変化の有無と種類

中食には、①家庭外で調理された食品を購入して持ち帰る「テイクアウト」、②宅配の「デリバリー」、③自宅や特定の場所で調理をしてもらう「ケータリング」の3つの種類がある。インドではこれら3つの種類の中食は各々独自の発展を遂げているのだが、本調査では「テイクアウト」の中食についてのみアンケート調査を行った。

まず、10年前と現在を比較して中食に変化があったかどうか、あった場合にはどのような種類の変化なのかを検討しよう。表10にみるように、全体では59%の学生がこの10年間に中食に「変化あり」と回答し、「変化なし」の41%を上回った。中食における「変化あり」の回答比率は外食における同回答比率に近似しており、内食に「変化あり」とする回答比率を大きく下回った。

属性別に検討してみよう。所得階級については、上位階級と下位階級間に「変化あり」との回答比率に大きな違いはみられなかった。市町村区分については、区分間の「変化あり」の比率の相違は僅少であり、外食の「変化あり」にみられたような「市」「町」と「村」の間の格差はみられなかった。「村」では外食よりも中食の機会が増え、その結果、「変化あり」との回答比率が増えたものと推測できる。社会集団においては、「変化あり」の回答比率が「変化なし」を上回ったのは、「その他」集団と「指定部族」の2つの集団のみであった。

表10：過去10年間(2009-2019年)の中食における変化の有無

人数/比率 変化の有無	所得階級			市町村				社会集団				
	上位階級	下位階級	計	市	町	村	計	指定カースト	指定部族	その他後進諸階級	その他	計
人数	13	13	26	5	4	17	26	1	17	5	3	26
変化あり	9	9	18	2	3	13	18	1	10	5	2	18
変化なし	9	9	18	3	1	4	8	0	7	0	1	8
計(人)	22	22	44	7	7	30	44	2	27	10	5	44
比率	59.1	59.1	59.1	71.4	57.1	56.7	59.1	50.0	63.0	50.0	60.0	59.1
変化あり	40.9	40.9	40.9	28.6	42.9	43.3	40.9	50.0	37.0	50.0	40.0	40.9
変化なし	40.9	40.9	40.9	28.6	42.9	43.3	40.9	50.0	37.0	50.0	40.0	40.9
計(%)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

(注)比率は、縦列の計(人数)に占める「変化あり」と「変化なし」の回答者数の比率を示す(%)。  
 (出所)筆者の食習慣調査(2019年)

次に食変化の項目別の比率構成を検討してみよう。表11に「属性別中食変化項目別複数回答数比率の分布」を掲げる。中食変化の項目の内容(「予算」「頻度」「品目」)、および合計が実質的に属性別学生数に占める複数回答数の比率を示している点は、すでに検討した表4と同じである。

全体の項目別比率では、「品目」が46%と最も高く、それに「予算」30%、「頻度」16%の順で続いている。「品目」の変化とは、より多様な品目を中食として取り入れるようになったということである。調査対象期間である10年間の物価上昇により中食の単価も上昇したことが「予算」変化の内容だともおられる。それでも、外食変化の際の「予算」の比率を13ポイントほど下回ったのは、中食の単価が外食よりも低いため、出費がそれほど気にならないためかもしれない。「頻度」の変化比率も、外食変化の際の同比率を9ポイントほど下回っている。中食の「頻度」がこの10年間にそれほど大きく変動しなかったことが変化比率の低さに表れていると捉えることができる。

表11：属性別中食変化項目別複数回答数比率の分布(2019年)

中食変化項目	所得階級			市町村				社会集団				
	上位階級	下位階級	計	市	町	村	計	指定カースト	指定部族	その他後進諸階級	その他	計
予算	31.8	27.3	29.5	28.6	14.3	33.3	29.5	0.0	33.3	30.0	20.0	29.5
頻度	13.6	18.2	15.9	28.6	14.3	13.3	15.9	0.0	14.8	20.0	20.0	15.9
品目	40.9	50.0	45.5	57.1	42.9	43.3	45.5	50.0	48.1	30.0	60.0	45.5
計(%)	127.3	145.5	136.4	171.4	114.3	133.3	136.4	100.0	144.4	110.0	160.0	136.4
複数回答総数	28	32	60	12	8	40	60	2	39	11	8	60
学生数(人)	22	22	44	7	7	30	44	2	27	10	5	44

(注)回答総数は複数回答なので、学生数を越える場合が多い。  
 ここでの計(比率)は、属性別学生数に占める複数回答数の比率を表示しているため、多くの場合、100%を上回っている。  
 下段に複数回答総数と学生数(人)を示した。  
 (出所)筆者の食習慣調査(2019年)

属性別では、所得階級の上位階級は「予算」が、下位階級は「品目」と「頻度」が相対的に高い比率になっている。複数回答数を示す合計の比率では、下位階級が上位階級を若干上回っている。市町村区分では、「市」の合計比率が171%ととくに高く、中食に変化ありとの回答が多かった。また、項目別の比率でも「市」は3種類すべての項目で他の区分の同比率を上回っている。調査対象者の多い「村」では「予算」の変化比率が33%と他の区分を上回る反面、「頻度」は13%と他を下回った。社会集団では、「その他」集団の合計比率と項目別の「品目」と「頻度」の比率が他の集団よりも高く表れている。それに対して、「指定部族」の項目別比率では、「頻度」の変化比率が他の集団よりも低くなっており、市町村区分における「村」と類似した項目別比率になっている。やはり、中食の場合も「頻度」が中食展開の大きな制約になっていると捉えることができる。

(2) 調査対象者の属性別中食品目選好の動向

本調査では、10年前と現在について回答者がどのような中食品目を好んでいるのかを複数回答でアンケートに記載してもらった。その調査結果を10年前と現在に分けて検討してみよう。まず、表12に、「10年前（2009年）における属性別中食品目別選好回答数比率の分布」、を掲げる。表内の数値は、調査対象者数に占める特定の中食品目を選好した回答者数の比率を示したものである。この比率を所得階級、市町村区分、社会集団の属性別に配置した。なお、品目の選択は複数回答としたので、中食品目別の計を足しあげると複数回答分の比率となり100%をこえる。同表では、複数回答の合計比率は190%となっている。これは回答者一人当たりが1.9品目の回答を行ったことを示している。

表12：10年前（2009年）における属性別中食品目別選好回答数比率の分布

品目	所得階級			市町村				社会集団				
	上位階級	下位階級	計	市	町	村	計	指定カースト	指定部族	その他後進諸階級	その他	計
サモーサー	36.4	31.8	34.1	57.1	57.1	23.3	34.1	50.0	33.3	10.0	80.0	34.1
ダベリー	36.4	22.7	29.5	57.1	57.1	16.7	29.5	50.0	18.5	30.0	80.0	29.5
ワダーパーウ	27.3	31.8	29.5	42.9	14.3	30.0	29.5	100.0	33.3	10.0	20.0	29.5
ブージャ	18.2	22.7	20.5	28.6	28.6	16.7	20.5	50.0	22.2	10.0	20.0	20.5
パーニープリー	18.2	22.7	20.5	28.6	42.9	13.3	20.5	0.0	18.5	10.0	60.0	20.5
ダールワダー	4.5	18.2	11.4	0.0	14.3	13.3	11.4	0.0	14.8	0.0	20.0	11.4
カチョーリー	13.6	9.1	11.4	14.3	14.3	10.0	11.4	0.0	14.8	0.0	20.0	11.4
マギー	0.0	18.2	9.1	0.0	28.6	6.7	9.1	50.0	3.7	10.0	20.0	9.1
サンドイッチ	9.1	9.1	9.1	28.6	28.6	0.0	9.1	50.0	0.0	20.0	20.0	9.1
カツレット	9.1	4.5	6.8	0.0	14.3	6.7	6.8	0.0	7.4	0.0	20.0	6.8
その他	4.5	13.6	9.1	14.3	14.3	6.7	9.1	0.0	11.1	10.0	0.0	9.1
計(%)	177.3	204.5	190.9	271.4	314.3	143.3	190.9	350.0	177.8	110.0	360.0	190.9
複数回答総数	39	45	84	19	22	43	84	7	48	11	18	84
学生数(人)	22	22	44	7	7	30	44	2	27	10	5	44

(注) 回答総数は複数回答なので、学生数を越えている。  
 ここの計(比率)は、属性別学生数に占める複数回答数の比率を表示しているため、100%を上回っている。  
 下段に複数回答総数と学生数(人)を示した。  
 (出所) 筆者の食習慣調査(2019年)

それでは、全体の欄における中食品目別の比率を比較してみよう。10年前にもっとも比率が高かったのはサモーサー(34%)であり、唯一の30%台の品目であった。それに20%台のダベリー(29.5%)、ワダーパーウ(29.5%)、ブージャ(21%:パコーダーとも呼ばれる)、パーニープリー(21%)が続いた。これらの品目は表7で検討した外食スナック類の品目とも重なっており、外食としても、テイクアウトの中食としても好まれる品目となっている。比率の低い品目のなかで、サンドイッチ(9%)とカツレット(7%)は西洋式のスナックであり、これらも食事形態(「肉食」「外食」「中食」)を問わず、現地では食べ慣れた品目となっている。さらに、比率は9%と低いが、中華式の様式に分類できるマギー(maggi: ネスレ社の即席麺の製品名であり、この製品がインドの即席麺市場を席捲している)が中食としても家で食べられていることは重要である。

属性別に、まず、回答者一人当たりの回答数をみてみよう。一人当たりの回答数が実際の中食の購入頻度や購入額と連動しているわけではないが、中食品目に対する関心の高さを示す指標として理解することができる。所得階級では下位階級が上位階級を若干上回っており、所得が中食品目に対する関心の高さを制約する要因になっていないことがわかる。市町村区分では「市」「町」の一人当たりの回答数が「村」の同回答数を大きく上回っている。社会集団では「その他」集団と「指

定カースト」の一人当たりの回答数が他の集団の回答数を上回っている。

中食品目の比率の構成を属性別に比較すると、所得階級では上位も下位も比率構成は類似している。ただし、若干の相違点としてマギーが下位階級のみであることが指摘できる。ここでのマギーとは調理されたインスタント麺をテイクアウトで購入するもので、中華式の軽食が中食にまで普及していることを示している。市町村区分では、「市」「町」の比率構成は類似しており、とくにダベリーとサモナーの比率は50%を超えている。また、パーニプーリーの比率も「村」の同比率を大きく上回っている。サンドイッチは「市」「町」だけで、「村」では報告されていない。やはり、市町村における中食品目の入手可能性の違いが、回答にも反映されているとみることができる。社会集団では、とくに「その他」集団において、ダベリー、サモナー、パーニプーリーの比率が60%以上ときわめて高い。学生数の多い「指定部族」の比率構成は全体の比率構成と類似しているが、サンドイッチは報告されていない。

次に、表13に基づき、現在(2019年)における属性別中食品目別選好回答数比率の分布を検討する。現在については、回答者一人当たり4.56品目の回答を行っており、回答数は大きく増加した。属性別の一人当たり回答数は階級間、市町村区分間、社会集団間でかなり平準化し、比率の格差は縮小した。

それでは、全体の欄における中食品目別の比率を比較してみよう。回答者一人当たり回答数が大きく増加したことにともない、中食品目別比率も10年前に比べて大きく増加した。

比率がとくに高かった品目は、サモナー(64%)、ダベリー(59%)、ワダーパーウ(57%)、パーニプーリー(52%)で、10年前に上位を占めた品目と共通していた。中華式の品目のマギー(41%)は人気の中食品目のひとつになり、サンドイッチ(30%)やカツレツ(25%)などの西洋式の軽食も比率を上げた。これら中食は家に持ちかえり食されるので、中食が展開すれば、自ずと家庭での食事のバリエーション(内食+中食)はより豊富になる。

中食品目の比率の構成を属性別に比較すると、所得階級では上位も下位も比率構成は10年前よりもさらに近似している。マギーも両階級ともに41%の比率を占め、中食品目としてもしっかりと定着している。市町村区分では、「村」の比率構成が「市」「町」の比率構成に近似するようになった。品目別の比率でも、10年前にみられた両者の格差は縮小した。マギーとサンドイッチも、比率は「市」「町」を下回るが、「村」でも選好される品目になった。



表 13：現在（2019 年）における属性別中食品目別選好回答数比率の分布

品目	所得階級			市町村				社会集団				
	上位階級	下位階級	計	市	町	村	計	指定カー スト	指定部族	その他 後進階級	その他	計
サモナー	63.6	63.6	63.6	71.4	57.1	63.3	63.6	50.0	59.3	70.0	80.0	63.6
ダペーリー	68.2	50.0	59.1	71.4	71.4	53.3	59.1	100.0	51.9	70.0	60.0	59.1
ワダーパーウ	54.5	59.1	56.8	71.4	71.4	50.0	56.8	100.0	59.3	40.0	60.0	56.8
バーニーパーリー	50.0	54.5	52.3	71.4	42.9	50.0	52.3	50.0	48.1	50.0	80.0	52.3
ブージャ	50.0	36.4	43.2	42.9	28.6	46.7	43.2	0.0	40.7	60.0	40.0	43.2
マギー	40.9	40.9	40.9	42.9	57.1	36.7	40.9	50.0	44.4	20.0	60.0	40.9
カチョーリー	40.9	31.8	36.4	42.9	28.6	36.7	36.4	0.0	29.6	60.0	40.0	36.4
ダールワダー	31.8	36.4	34.1	42.9	42.9	30.0	34.1	0.0	33.3	40.0	40.0	34.1
サンドイッチ	36.4	22.7	29.5	71.4	57.1	13.3	29.5	50.0	22.2	20.0	80.0	29.5
カツレツ	27.3	22.7	25.0	42.9	28.6	20.0	25.0	0.0	29.6	10.0	40.0	25.0
その他	13.6	13.6	13.6	14.3	14.3	13.3	13.6	0.0	14.8	20.0	0.0	13.6
計 (%)	481.8	431.8	456.8	585.7	500.0	416.7	456.8	400.0	437.0	460.0	580.0	456.8
複数回答総数	106	95	201	41	35	125	201	8	118	46	29	201
学生数(人)	22	22	44	7	7	30	44	2	27	10	5	44

(注) 回答総数は複数回答なので、学生数を越えている。

ここの計(比率)は、属性別学生数に占める複数回答数の比率を表示しているため、100%を上回っている。

下段に複数回答総数と学生数(人)を示した。

(出所) 筆者の食習慣調査(2019年)

社会集団では、「その他」集団が多く、品目において 60%以上の高い比率を示し、現在においても、中食にもっとも馴染んでいる集団である。「その他後進階級」は 10 年前には回答者一人当たり回答数が僅少であったが、それが大きく伸びた結果、品目構成が多様化し、各品目の比率も増加した。「指定カースト」は回答者数が 2 名と少ないために、報告された品目数は少ない。社会集団のなかでも「指定部族」の比率構成がこの 10 年間にもっとも変化したとみることができる。中食品目の構成が多様化し、各品目の比率も大幅に増加した。「指定部族」の多くは「村」に居住しているために、中食品目の比率構成が「村」区分の比率と非常に近似していることが確認できる。10 年前に零か僅かな比率であったサンドイッチ、カツレツ、マギーも 20～40%台の比率に増加している。総じて、中食の「頻度」については、この 10 年間にそれほど大きな変動はみられなかったが、選好の対象となる中食の品目は大幅に増加し、選択の幅が増えた。

## おわりに

本稿では、第 3 次調査結果に基づき、調査対象者世帯の食事形態の変化を調査対象者(世帯)の世帯所得、出身市町村区分、社会集団の 3 つの属性を中心に、外食と中食の動向分析を行った。

属性相互の関連については、所得階級、市町村区分、社会集団の 3 つの属性は相互に深く関わっていることが確認できた。とくに、社会集団のなかの「指定部族」と「その他」集団では、市町村区分では前者が「村」に後者が「市」「町」に集中しており、所得階級でも前者が「下位階級」で後者が「上位階級」に集中するなど、3 つの属性の相互関連が対照的であった。

外食の規模と動向については、調査時点(2019 年)と 10 年前(2009 年)を比較して外食変化の動向を検討した。外食変化の項目のなかでは、「予算」の比率が最も高く、それに「品目」が続いた。調査対象期間中の物価上昇が「予算」に、外来料理やファストフードの展開が「品目」構成に影響を与えた。さらに、所得階級間、市町村区分間、社会集団間の外食回答者比率や月間外食回数幅にみられる格差が大きく縮小したことも重要な変化であった。この 10 年間に外食を行ったとの報告

者比率は増加し、月間外食回数の幅も広がりを見せた。しかし、外食の「頻度」の比率は低迷し、食事形態における外食の位置づけを変えるほどの規模の変化はもたらさなかった。食事形態に占める内食の比重が高く、外食の比重はそれほど高まらなかったことが確認できた。

外食での料理選好については、10年前(2009年)には郷土料理として馴染み深いグジャラート料理とスナック類を選好したこと、現在(2019年)ではレストランではパンジャブ料理、露店では中華料理と南インド料理がシェアを伸ばした。

家族別の外食料理別選好の傾向として、祖父母世代と父母世代ではグジャラート料理とスナック類の比率が非常に高いこと、現世代ではパンジャブ料理と中華料理の比率が高いことが指摘できた。また、イタリア料理と非菜食料理も現世代に共通する選好料理となっていた。

中食調査は「テイクアウト」に限定して行った。調査対象期間の10年間に全体の約6割の学生が中食に「変化あり」と回答した。所得階級については、上位階級と下位階級間に「変化あり」との回答比率に大きな違いはみられなかった。市町村区分については、区分間の「変化あり」の比率の相違は僅少であり、外食の「変化あり」にみられたような「市」「町」と「村」の間の格差はみられなかった。「村」では外食よりも中食の機会が増え、その結果、「変化あり」との回答比率が増えたものと推測できる。

変化の項目のなかでは、「品目」の比率が最も高く、それに「予算」「頻度」の順で続いた。「品目」の変化とは、より新たな多様な品目を中食として取り入れるようになったということである。たとえば、中華式の品目のマギーが人気の中食品目のひとつになり、サンドイッチなどの西洋式の軽食も中食品目別比率を上げた。このように、「品目」の選択幅は少し広がりを見せたものの、「頻度」は3要因のなかでもっとも低く、中食の規模を変えるような変化にはなっていない。

このように、中食も外食と同様に、この10年間に「予算」「品目」「頻度」の変化はみられるものの、それらの変化は食事形態における内食の比重を大きく変えるほどの規模の変化にはなっていない。換言すると、農村部だけではなく都市部の食事形態においても内食の優位は崩れていない。以上か今回の調査で得ることのできたもっとも重要な知見である。

#### 注

- (1) グジャラート・ヴィディヤーピート (Gujarat Vidyapith : M.K. ガーンディーが1920年にアーメダバード市に設立した大学) の学生の特徴はグジャラート州内の農村部からの入学者が多いこと、社会集団では指定部族 (Scheduled Tribes: STs) 指定カースト (Scheduled Castes: SCs) その他後進階級 (Other Backward Classes: OBCs) などのいわゆる「後進階級」の比率がきわめて高いことにあり、農村部および後進階級の食習慣の動向を把握するために適した調査対象であった。第1次調査の調査目的は学生世帯の食材の変化と菜食・肉食や断食の動向を明らかにすることにあつた (この分析結果は、Shinoda 2017 にまとめた)。
- (2) 女子公立職業教育学校 (Government Polytechnic for Girls, Ahmedabad) の学生は、グジャラート州の最大商工業都市であるアーメダバード市で生まれ育った学生が多数を占め、学生は全員が女子であるため、都市部の女性を対象とした食習慣調査となった。さらに、調査地域はジャイナ教徒を中心とするパニヤー (商業カースト) の食文化の影響の強い地域であるため、調査結果にもその影響が確認できた。第2次調査では食習慣の動向を内食、外食、中食などの食事形態の変化を中心に跡付けた (内食についての分析結果は、篠田 (2021) にまとめた)。
- (3) グジャラート・ヴィディヤーピートで再調査を行ったのは、学生の出身地がグジャラート州内各地に分散しており地域的多様性がみられること、農村部出身や後進階級の学生が多いことなどの特徴が、食習慣の都市農村格差や社会集団間の相違を調査するうえでの利点が大きかったためである。第3次調査では44名の学生

- を対象に、内食、外食、中食などの食事形態のほかに、竈や食器などの台所用品の変化についても調査した。また、祭日食、菜食・肉食、断食なども調査項目に含め、ハレとケの双方における食習慣の調査を実施した。
- (4) 第3次調査のアンケート調査では、上記した3つの属性のほかに、性、配給カード、宗教、出身県、出身地方などの属性に関する情報も収集した。
- (5) 州レベルより下位の地方自治体は、都市部自治体 (Municipality) と農村部自治体 (Panchayat) に大別されている。都市部自治体はさらに、大都市地域における自治都市 (Municipal Corporation)、小都市地域における都市評議会 (Municipal Council) 及び農村から都市への発展段階にある地域におけるナガル・パンチャーヤト (Nagar Panchayat) の3種類の組織に分類されている。自治都市は州都クラスの大都市、都市評議会は概ね人口1万から2万5,000程度の都市、ナガル・パンチャーヤトはそれ以下の都市である。農村部自治体は、村 (Village)、複数の村を包含する中間単位の郡 (グジャラート州では Taluka—引用者)、複数の郡を包含する県 (District) の三層の自治組織で構成されている (『インドの地方自治』【第二次改訂版】一般財団法人自治体国際化協会、14-15頁、URL: <http://www.clair.or.jp/j/forum/pub/docs/j50.pdf>、2021年8月10日アクセス)。本稿での市町村区分の「市」(city) は自治都市、「町」(town) は都市評議会やナガル・パンチャーヤト、「村」(village) は農村部自治体の村に対応する区分として使用する。
- (6) 北グジャラートはパータン県、メーサーナー県以北でラージャスターン州と接する諸県、中央グジャラートはアーメダバード県、ガーンディーナガル県などグジャラート州中央部の諸県、南グジャラートはスーラト県やトライブエリアの南部の諸県、半島部はカッチから半島部にかけての諸県で構成される。
- (7) 主だったスナック類の特徴を簡潔に以下に示す。パーウバージー (pavbhaji: スパイシーな野菜のグレービーソースを丸パンで食べるファストフード)、ワーダーパーウ (vadapav: 丸パンに揚げたジャガイモを挟み込んだ菜食ハンバーガー)、ダベリー (dabeli: 丸パンに茹でたジャガイモと香辛料を混ぜ挟み込んだ伝統的な菜食ハンバーガー)、ダールワーダー (dalvada: ムングダールの揚げスナック)、カチョーリー (kachori: 小麦粉の生地に黄色のムングダール、黒コショウ、赤唐辛子の粉末、ジンジャーペーストを詰め揚げたスナック)、ブージーヤ (bhujija: グラム粉のころもにつけ揚げたフリッターで、パコーダー (pakoda) と呼ばれる)、サモサー (samosa: 小麦粉の薄い皮にジャガイモなどの具材を三角錐に包み揚げたスナック)、パーニープリー (pani puri: 小さなプリーをパーニー (汁) と一緒に食する特徴のあるスナック)、カーマン (khaman: 挽きたてのチャナダールまたはチャナ粉を水に浸して濃厚なペーストを作り、海綿状のパンのような食感に焼いたスナック) などが代表的なスナックである。

#### 参考文献

- 篠田隆 (2021) 「インド・グジャラート州における都市若者の内食状況：アーメダバード市女子公立職業教育学校学生の事例研究」『東洋研究』第220号、大東文化大学東洋研究所、29-59頁。
- 篠田隆 (1991) 「主食・肉食の変化：インド」『ASIA21』(1)、現代アジア研究所、大東文化大学、104-110頁。
- Shinoda, Takashi (2021) "The Transformation of Food Habits in Modern India", in Grand-in-Aid for Scientific Research © 2018-2020, Japan Society for the Promotion of Science, pp.11-34.
- Shinoda, Takashi (2017) "Food and Identity among the Students of Gujarat Vidyapith", in Takashi Shinoda, Takako Inoue and Toshihiko Suda(eds.) *Social Transformation and Cultural Change in South Asia*, Daito Bunka University, pp.3-45.